

吉備国際大学
 社会福祉学部研究紀要
 第12号, 145-156, 2007

英語所有構文の例外に関する考察 (1)

平見 勇雄

A Study on the Exceptional Examples of the English Possessive Genitives(1)

Isao HIRAMI

Abstract

In the previous papers, we have seen the characteristics of the forms A's B and B of A, based on the relationship between form and meaning within the framework of cognitive linguistics. But what should be expressed with the correct form is sometimes expressed by the incorrect form, which results in exceptional examples. However, there is no choice but use the incorrect form instead of the correct form in certain circumstances. It is natural that these exceptions have effects on the given relationship between form and meaning.

The aim of this paper is to clarify when to use which form.

Key words : the English possessive genitives, exceptions, linguistic tendency

キーワード：所有構文、例外、全体的言語特徴

はじめに

英語の所有構文（以下 A's B, B of A の両形式を指す）に関しての考察をこれまで続けてきたが、一方の形式でしか表わせない A と B の組み合わせもあれば、両方の形式で表される組み合わせもあった。そして認知言語学と呼ばれるアプローチから、それぞれの形式（あるいは両形式）で表される理由を求めてきた。しかしこれらの仕組みを説明する論を立てても例外が出てくる。その複数の例外をどう扱えばよいのか、ということについてここ数年いくつかの例に関しては説明を試みてきたが、すべての例を説明し切れているわけではない。ただ実際、言

語で起こっていることを見ても、たとえこれまでの理論で説明できない例が残ったとしても、これまでの分析が否定されるわけではもちろんない。例外に関してのいくつかの現象に関しては別の理由からその正当性が主張できると思われるのである。たとえば *that long nose of his* という表現がなぜ許されるのかを説明するのに1つの考え方を取るだけでは到底出来そうもない。しかし英語に見られる特徴という観点から考えるとこういった表現が生まれるのは決しておかしいことではないのである。

英語という言語は形式と意味が強固な関係を作り出している反面、コミュニケーション上の効率性か

らその関係が崩れ、それが例外を生み出していく場合もあるということを以下で主張していきたい。

1 語に関しての一般的事実 — 複数の表現が存在する裏に潜んでいるいくつかの理由 —

1. 1 複数の言葉が存在する利点について

本題に入る前に語と呼ばれる意味的にまとまっている単位について、以下の議論に関係あることを中心にその特徴を簡単に述べておきたい。以下は言葉が(人間がそれを使う能力や認識の面から見ると)いかに合理的にできているかを確認するための説明でもある。したがって英語や日本語に限らず、おそらくはほとんどの言語にその言語に見合ったような形で見られる特徴のはずである。(したがってそれらの特徴の程度やあり方は各言語によって当然異なっている。以下のことは常識的なこととして言語学の分野では認知されていると思われる内容である。)

語というものは複数の意味的にはほぼ同義と思われるような語であっても完全に同じというわけではなく何らかの違いがある。ある概念を表す言葉は、たいていはたった一つだけ言葉が存在するのではなくそれに代わる表現(部分的に重複する内容の他の語)がある。特にそれが日常、頻繁に使われる場合はその確率は高い。なぜ複数の表現が存在するか、その理由はさまざまあろうがそのうちの一つは婉曲表現をするためである。我々は直接的な言い方を避けたい場合婉曲的な言い回しを使う。その場合、基本的には二つは同じ内容を意味することになる。たとえば我々はしばしば便所という言葉ではなく、トイレやレストルームという語を使う。外来語と呼ばれる語は、その言葉が入ってきた国にそれまで存在しなかった概念を持ち込む時に使われる場合もあるが、便所をトイレやレストルームと言うように既に存在する言葉を置き換えただけの場合は複数の同義語を生むことになる。男親を意味するパパという言葉

もその一つである。母親が小さい子供にその言葉を教える場合、おとうさんと表現しようとパパと表現しようと違いはない。しかし男親を指す語は、おとうさんやパパの他、とうちゃん、おやじ、父上など複数あり、子供が成長しそれらを使う場合は使い分けをする。語同士の間で違いが生じているからである。小さい子供が父親をおやじと呼ぶことはないだろうし(恐らくは平均的な母親は子供に男親を呼ばせる際「おやじ」という言葉を使わないだろうがそれは同じ男親を指す言葉でもそれが適切な言葉ではないと認識しているからである。)、父上という言葉は、かなり古い時代でしか使われそうにないものである。また大人であれば直接父親に話しかける場合と他人に自分の男親のことを目上の人に話す場合とでは、それぞれ別の表現を使って使い分けをするだろう。

この例からも明らかのように男親を指す言葉の例一つ取り上げてみても、我々が日常使っている言葉に関する特徴が垣間見える。ある指示物に対して(特によく使われる語に関しては)複数の表現が生まれるが、それらは決して完全に同じ意味を持っているわけではない。さらに文体的な特徴以外にも言葉によっては元々の意味にとどまらず別の意味内容を持つようになる場合もある。(たとえば、上の例で言えば、おやじという言葉は父親以外の意味を持つようになって全く別物を意味し、元々の意味内容を拡大している。)

ある概念を表す言葉は普通一つではなく複数生まれ、それらはそれぞれ少しずつ違う意味なり、ニュアンスを持ち、独自の存在意義を持つようになるが、本当のその存在理由とは何であろうか。上に挙げた婉曲的な言い回し以外にも複数ある必要性があるだろうか。

一つ概念に対し複数の表現があれば細かなニュアンスを使い分ける可能性を広げられるという点で存在意義があるが、もしある言葉をしゃべろうとし

てその言葉が思い出せない場合、あるいは誰かにその言葉の意味を教えたり説明したりする場合、それに代わる表現があれば言いたいことを相手に伝えることができる。コミュニケーションを円滑にする役割を果たしてくれるのである。したがって複数の表現が存在するのは婉曲的な表現以外にコミュニケーション上の利点があるのなことなのである。つまり複数の表わし方があるのは一つだけの理由で存在しているわけではないことがわかる。

1. 2 言葉の存在数と価値との関係

ところで、たとえば婉曲的な言い回しをしたいという何らかの動機があって複数の言葉が生まれるのか、それとも複数の言葉があるからこそそれぞれが違う意味を持つようになるのかということに関してはどちらの場合もあるように思われる。どちらがどちらを引き起こすかということとはともかく、複数の表現が存在すると何らかの違いが出てくるが、意味の違いがあるだけ語が存在するかということではない。もちろん意味ある違いであればそれに近い数だけ残る可能性は大いにある。しかしそういった違いが存在する、となるかどうかは実はそれを扱っている集団で異なる。たとえば池上（1978：221）によると、漁業に関わる人達の中では「ブリ」を「セジロ」「ツバス」「ワカナ」「カライオ」「イナダ」「ワラサ」「ブリ」とその成長段階に応じて分類する。しかしこの分類は一般の人達にとって漁業関係者ほど重要性はないからここまでの細かな違いには疎いはずである。当然のことながら日本以外の海外の漁業関係者がブリを同様に扱っているとも限らない（日本における鯛の重要性は他の国のそれとは違っている）。分類がなぜ起こるのか、その理由は価値に違いがあるから区分が存在するというところだろう。これは逆に言うと価値の点で違いがなければ、一つの言葉をあててしまうということでもある。ゴミと我々が呼んでいるものも同じで、ゴミ箱

に入ったもの一つ一つは違ったものであるのに、我々にとってそれらは同程度に価値がないものであるため、一まとめにそう呼ぶ。ところでブリの例を考えてみると、表現できる語数が多いと細かなニュアンスが伝えられるという利点のある一方、数の多さが記憶に負担を強いることになる。ましてやブリだけなら問題ないが、同様の細かな分類があらゆるものに及んだ場合には相当の負担になる。そしてそれは受け取る側にも同程度の記憶の負担を強いることになるのである。そういった面から改めて分類を考えれば現在あるような状態で語が存在しているのはコミュニケーション上の利点や記憶への負担の兼ね合い等も関係していることになる。ただしそういった兼ね合いがこの上なく理想的な形で実現しているかということと必ずしもそうではない。これ以外の要因も絡んでくるからである。

漁業に関わる人達の魚に対する分類を見てわかるように、ある集団の人達にはあるものが細かく分類されることがある。その場合一般の人達が一見ただけでは区別できないものにも違ったラベルを貼ることになる。もっとつきつめればそれは最終的には小さな集団から個人という単位にまで及ぶ。つまり区分にはその言葉を使う人それぞれの価値が反映されていることになる。したがって国によっても当然異なっているし、同じ国でもある集団とある集団の間では異なっていて、違いがあるというのは頻繁に見られる日常茶飯事のことなのである。

個人の認識の違いとともにそれぞれの文化において意味づけや置かれている立場や環境が区分に大きく関与していることもある。文化における区分の違いを一つ挙げると日本語では「こな雪」「ぼたん雪」など雪に関して複数の分類があるが、こういった細かな分類が見られる文化もあれば見られない文化もある。雪の降らない地域に同じような分類があるとは思えないし、また見られたとしてもその区分の仕方が同じとは限らない。エスキモー語には「降りつ

つある雪」「積もった雪」「溶けかかった雪」など特殊な状態の雪を表す語がいくつもあるようだ。なぜならエスキモー人らにとっては、雪は生活を支える重要な素材であるため、その文化には区分により違いを感じさせる土台があるからである。

しかしこういった分類は常にその時代その時代の区分を適切に反映しているだろうか。また逆に区分のないことが認識の違いを感じていないということになるだろうか。

たとえば日本語では兄弟を分類する場合、兄、弟という概念があるが、英語では brother の一語である。池上 (1978: 210) によると、文化的なこと (日本では同じ兄弟であっても「長男」であるかそうでないかによって扱い方の上で差があった) が日本語の語彙の構造の上に反映されている一方、英語圏ではそうではなかったため、このような違いが見られると推測している。ただ英語で brother の一語で表現され語彙上区別がないからといって、英語を使う人間が上下の区別を感じていないわけではないだろう。その点を考えると認識上区別が感じられていてもそういった区分すべてが完全に反映されているわけではない。逆に日本では長男が現在ではかつてほどの扱いがなくなったとはいえ言葉は残り続けている。語の区分には既にその由来がかなりの程度消えてしまっているのにそのままとなっているものもあるのである。

区分には価値が反映されているというのが大前提であるが、価値は決して不変のものではなく個人や集団、そして時代や状況など複数の要因が絡んでのものであるので、決して今の価値観を正確に反映しているとは限らない。時間の経過により区分の価値が薄れてしまう一方で、区分するという習慣だけが強く残り価値がその区分に現在かかわっているとは言い難いような場合もあるのである。したがって現在ある言葉にはすべて同程度に我々の認識が必ずしも反映されているわけではない。これが言語の現実

なのである。

1. 3 理解という点から見た言葉の使われ方

一言葉の効率性

言葉の効率性という点から以下のような特徴も指摘しておきたい。

外国語からある言葉を借用することについては少し上でも触れた。もともと母国語にはない概念を導入する時にはその言葉に相当する語を作り出すより、その言葉が導入される国の人にとって発音しづらくなければそのまま使う方が便利である。(ただし外国の文化の中である位置づけにあるものを別の文化の中に導入するのであるから全く同じ意味合いを持つものとしてその文化圏で捉えられるかどうかは別の話である。) このようなそれまで言葉として存在していなかった内容や表現しづらい概念を言葉にする場合、借用以外我々はどのような工夫をしてそれに対処しているのだろうか。

しばしば我々は初めて見るようなものや未知のものを相手に伝えようとする際、出来るだけ既成の内容を手掛かりとして「~のようなもの」と何かに喩えて表現することが多い。たとえばこれまで会ったこともないような人を相手にわからせようと説明する時、雰囲気なり、性格なり、容姿なり、あるいは特徴なり、何かの点で、おたがいに共有している(と思われる)情報の中からよく似た人、あるいはその中で一番近いと思われる人を引き合いに出して語ることが多い。それと同様、これまで経験のないことや、理解が難しい概念の場合も、出来るだけ既に習得しているものの中から何らかの類似点を見出してそれに近いものをもって語る、ということをする。特にこれまでに経験のないことは、なかなか一つだけを取り上げて言い表すことは難しいため、類似点を見い出せる面だけを取り上げて、部分的にその概念を借りて相手にわからせようとする。それはある見知らぬ人を他人に説明しようとする場合、口

は誰それさんに似ていて、目は誰それに似ている、
 というように複数組み合わせることによって、ある
 新しいもの（こと）を理解しようとするのと同じで
 ある。ある新しいものを理解する際、既に習得した
 ものとの関連から語ることは既に上で述べたように
 記憶しやすいということ（すなわちそれは脳への負
 担の軽減ということになる）とも関係しており、言
 葉が効率的に使われ得るという点でも有効である。
 こういった方法である概念を理解しているもの
 には、我々が日常全く意識しないで指摘されるまで気
 付かないまま使っているものが数多くある。認知言
 語学の分野で非常に有名な本 Lakoff (1980) の中で
 挙げられている多くの例の一つに次のようなもの
 がある。（以下五つの例文と訳はその翻訳より。）

You're wasting my time.

君はぼくの時間を浪費している。

This gadget will save you hours.

この機械装置を使えば何時間も節約できる。

How do you spend your time these days.

この頃どんなふうに使っているの。

I've invested a lot of time in her.

彼女には随分時間をさいてやったよ。

You need to budget your time.

時間を配分する必要がある。

時間というのは手にとって見ることのできない抽
 象的なものである。そのため具体的なものに見立て
 た方が理解しやすいであろう。これらの例は日本語
 訳からもわかるように、時間に関する概念のある一
 面とお金にまつわる概念との間に類似点を見つけ出
 すことができるためお金のやりとりに使われる言葉
 を「借りて」時間というものを「部分的に」理解し
 ていることがわかる。この例のように言葉に書き出
 してみても初めて我々はあるものとあるものの間の類
 似性に気づき無意識のまま時間を理解しているとい
 うことを知ることもあるのである。（こういった例
 はたくさんありそれが上記の Lakoff (1980) にはか

なり紹介されている。）

実はこういった例を挙げるまでもなく、新たに習
 得する概念を既に習得している言葉でもって理解し
 ようとする営みは言語ではごく当たり前に見られる
 ことである。最も顕著な例の一つが具体的な意味と
 抽象的な意味との関連である。具体的な（物理的
 な）ものは目に見えるが抽象的なものはそうではな
 いため、（すべてではないけれども）しばしば具体
 的なものを意味する語を使って（借りて）それに関
 係する抽象的内容を表わそうとする。Chair が椅子
 という物理的なものから地位という抽象的な内容に
 変化するのは日本語に限らず英語でもそうだが、抽
 象的概念の中にはそれに関係の深い具体的な語を通
 して理解する場合がある。つまり言葉の効率性はこ
 ういったことにも反映されているのである。

以上のことをまとめると次のようになる。語は
 我々が見たり経験したりすることと関係しながら存
 在していることになる。そしてある概念を表す語は
 普通複数あり、それぞれが少しずつ違う意味を帯び
 て存在していて文化的なこととも無縁ではない。重
 要な概念は細かく分けられるが、その分類の背後に
 は常に記憶への負担軽減やコミュニケーション上の
 有益性などが絡んでいる。語はしばしば他の意味に
 転用されたりするが、そのうちのいくつかの転用の
 理由は未知なものや見えない抽象的概念が具体的な
 もの、既知のものから転用されると我々にとって理
 解しやすいからであると同時に、記憶の負担軽減か
 ら考えても効率的だからである。いわば人間の都合
 が言葉の成り立ちには反映されているのである。た
 だ言葉は現在からみると歴史的な名残りがそのまま
 になっているものもあり、現在の分類が必ずしも完
 全な形で我々の現在の認識を反映しているとは言い
 難い。その点で言葉には人間くさいというか気まぐ
 れな面があり、決して機械のようにきちんと変化し
 ていくものではないのである。しかし大局的な見地
 から言えば、言葉は人間の能力や経験などのかか

わりの中で総合的なバランスを保ちながら存在していると思われる。

2 文についての考察

以上は言葉の成り立ちや存在の背後にある特徴の一部であるが、語以上の単位である句、節、文にもその成り立ちや存在に何らかの人間の動機がからんでいるのだろうか。これまでその研究が最も進んでいる単位である文について簡単に見ることにする。

日常的な経験を通して人間の価値が語の成り立ちにかなりの程度反映されているとなると、文という単位にも、語とよく似た、あるいは別の形で何かが反映されている可能性がある。そういった目で文を見てみると文の成り立ちの理由を求める際一つの可能性を示唆してくれるのが主語と目的語の語順である。

John kicked the ball.

この文はジョンがボールを蹴ったという意味の文だが、語順としてジョンがボールよりも前にある。これはジョンの動きがボールの動きよりも先であるため順序としては両者が視界に入っている時には、我々は行為を行うジョンにまず目が向き、それからジョンが蹴ったボールに目がいくのが普通だからである。動くものと動かないものを比較すると特別な事情が働かない限り人は普通動くものに反応するという生物的な特徴があるのである。そのため語順においてもジョンが先に来ているのではないかという説明ができるのである。(もちろんこれとは別に人と物という比較の点でも物より人に着目するのが普通であるから John が先に来る。)

ところで抽象的な内容は具体的な表現を借りて表される例のあることを見たが、両者の関係をこういった文を検討する際にも当てはめて考えてみると、行為が具体的で目に見える性格のものではなく抽象的な性格を持つ場合にも主語と目的語の間のエネルギーの流れという点では類似性を見い出せるた

め以下のような文においても同じ形で表されていると考えることができる。

I saw him yesterday.

私が彼を見たという行為が彼に影響を及ぼすかどうかは外からは具体的にわからないことが多い。しかし抽象的な行為であっても主語と目的語の間に起きている行為の有無を考えると、少なくとも見るという行為を行っているのは彼ではなく私である。

以上のことをまとめると、他動詞構文と呼ばれる文で特に kick のような具体的行為を表している動詞の例を考えると、主語と目的語の順序が人間の認識の順序と一致しており、こういった文にもやはり人間の経験的な側面が反映されていると見ることができる。そして see のような動詞の場合にも主語と目的語の間の関係に接点(類似性、平行性)を見出すことができるため同じ形式を使って表されていると考えられるのである。実際には具体的行為、抽象的行為は完全に二極化しているのではなく中間的性格のものもあり両者には連続性がある。より具体的寄りか、より抽象的寄りか、あるいは両方の性質を持つ動詞もあり、場面によりその意味合いが違ってくる場合もある。(したがって具体的、抽象的という性質のみに着目して違う構文に分けることはできない。)連続性があるが故に一つの構文で表わされる理由が出てくるのである。これが前の章で述べた言葉を効率的に使っているという点で指摘できることなのである。

以上は人間のものに対する着目順序と語順が関係していると考えられる例であるが、Lakoff (1980) には次のような例も紹介されている。(以下その訳(192)からの抜粋の一部である。)

I taught Greek to Harry.

<私はギリシア語をハリーに教えた。>

I taught Harry Greek.

<私はハリーにギリシア語を教えた。>

二番目の文では taught と Harry が近接しているの

で、ハリーは教えられたことを実際に付けた、つまり、教えるという行為がハリーに影響を及ぼしたことをより多く暗示している。次の例はもっと微妙である。

I found that the chair was comfortable.

<その椅子が快適であることがわかった。>

I found the chair comfortable.

<その椅子は快適だった。>

二番目の文は「直接的経験によって」、つまり座ることによってその椅子が快適であることがわかったことを示している。最初の文ではその椅子が快適であることが「間接的」にわかったという可能性が含まれている。つまり、人に尋ねたり、椅子を見まわしてみてもわかったという可能性がある。二番目の文ではIという形態がthe chairやcomfortableという形態により近接している。この文のシンタクスは、「私」は椅子が快適であることがわかったことを示している。Iという形態がthe chairやcomfortableという形態により近接すればするほど、示されている経験はより直接的なのである。

以上の抜粋が意味していることは、我々が日常経験している、近ければ近いほどおたがいの影響が大きいという性質が、文の中の語と語の間の位置関係にも反映されていると見るができるということである。つまり語順にしても語の位置の問題にしても、人間の認識や経験が文という単位にも語の場合と同じく（しかし違った形で）反映していると言えるのである。

ここで紹介したのは認識や経験の反映の一部の例であるが、以上のような観点から英語の文や語を見ると人間が見たり経験したりするあり方が何らかの形で（その品詞や形態の特徴に即した方法で）反映されているととらえることも可能なのである。しかしすべての言語でそうになっていると主張しているのではない。言語が持つ性格からしてそういったこと

が反映しづらい言語もあるであろうし、逆に反映しやすい言語もあるだろう。外来語（借用語）を受け入れやすい言語もあればなかなか受け入れない言語もあるのと同様、言語それぞれである。しかし少なくとも英語という言語においては以上述べたような観点から言語を見て分析を行うことが可能だと考えられるわけである。

このような特徴を持った言語ならば、語や文以外の中間的な単位である句や英語所有構文にもそれ相応の特徴が反映されている可能性は当然あり得る。もちろんその品詞の持つ性格に応じた反映の仕方である。事実A's Bという形のAとBの関係には他動詞構文の主語と目的語に似た順序の見られることがLangacker(1993)に指摘されている。このことは既に別の機会ですべてきたので改めて取り上げないが、こういった「順序」や「語の位置」が英語で重要な意味を持っていると主張できる別の例やそれに関係する理由について少し考えてみたい。

3 「形式」という特徴について

3. 1 形式の重要性

我々が英語を中学、高校で習い、理解するためには多くの文法事項を習得しなければならない。その中でも5文型をマスターすることは大変重要なことで必ず通らなければならない内容であるが、この「文型」という表現を日本語に当てはめることはできるだろうか。「～に～をあげる」という表現を一つの形式とみなすこともできるが、「～を～にあげる」と言ったところで日本語では英語のように意味に影響しない。（先ほど見たように英語では「～に」「～を」にあたるものを前後させると文型が変わるだけでなく意味まで変化してしまう。）この点だけで言うと「てにをは」のある日本語は英語と比較すると語順が意味に与える影響は少ないように思われる。助詞さえ変われば語順が変わらなくても伝えた内容が大きく違って解釈されることはない。（た

だしアクセント等の問題を無視してのことである。) 語順に関してもっともわかりやすい例が能動文とそれに対応する受動文である。

John loves Mary.

ジョンはメアリーを愛している。

Mary is loved by John.

ジョンに (よって) メアリーは愛されている。

もちろん二番目の文は日本語でも「メアリーはジョンに愛されている」と言った方がよりしっくりくる。ただ日本語文では語順としてジョンが前にあるからといって文として成立しないほどおかしいわけではない。しかし英語では能動態を受動態にする場合必ずその語順を変えなくてはならない。この点で英語は日本語と比較すると文が生成される上で語順が大きな役割や意味を担っていると言える。特に最初の能動態文のように、主語も目的語も固有名詞の場合は名詞に格変化がないため、まさに語順あるいは語の位置が行為者か被行為者かの意味役割を決定してしまうのである。

これとは別に語をどこに置くかという問題が英語では日本語よりも重要な要素であることは、いわゆる It ~ that, It ~ to の構文と呼ばれるものが存在することからも伺える。主語が長くなることを嫌い、それを避けるために後ろに置くという特徴は文の形を整えるための処置である。天候、時間などを表現する際に、本来は既出のものを指す場合に使われる it が、その性格を失って主語の位置に置かれるが、それは文の形を整えることと決して無関係ではないだろう。

It ~ that, It ~ to のような主語が長くなるのを避ける処理と同じ原理が働いていると思われる例は次の例にも見られる。(以下の例は英語変形文法 (1985: 64-5) からのものである。)

The fact that the moon revolves around the earth is known to everybody.

The fact is known to everybody that the moon

revolves around the earth.

A woman who was six feet tall came out of the room.

A woman came out of the room who was six feet tall.

これらは外置 (変形) と呼ばれる (Extraposition from NP) ものであるが、原理としては主語が重くなるために後ろに置かれることから It ~ that の構文と共通するところがある。

しかしここで重要なことは It ~ that の構文と同様、that 以下が後ろに置かれたからといって (つまり語の位置が変わったからといって) 意味の違いを持たせるための処理というわけではないということである。このことは、逆に言えば英語では違う形を許したからといって必ずしも能動態、受動態の場合のように (とらえ方を含めた) 意味の違いを持たせるためではない場合もあることを示唆している。

以上のことから、英語は語の位置が重要で多くの場合意味に影響する一方で、意味を変えるために語を動かすわけではない場合もあるということである。(しかしこのあと述べるようにもちろんそれにはそれなりの理由があるからこそ形を変えるのである。)

3. 2 形式と意味の問題点

しかし今述べた例は以上のような場合に限られているのではなく、2で紹介した意味の差を生み出すはずの文にも一部見受けられるのである (池上 1995: 87)。2で見たように、いわゆる第三、第四文型と呼ばれる構文の間には意味の上で実際には細かなニュアンスの違いがあった。同様の例を池上 (1995: 90) から引用する。

a) John taught Mary English.

b) John taught English to Mary.

a) ではメアリーが英語を習得したことが暗に含まれており、一方の b) はそのような意味合いからは

中立であるとのことである。しかしこういった構文間にも間接目的語が長くなると同様の傾向が見られる。

I showed a picture to the man who sat next to me on the train.

I showed the man who sat next to me on the train a picture.

下の文は音調などの点で特別な配慮がないと困難なようである。これは下の文の間接目的語の長さ（基本的にすわりの問題だけではなく相手にわかりやすく内容を伝えるというコミュニケーション上の都合もある）が問題となっているのであり、a) b) で本来見られるはずの意味の差を表わそうとして文型が変わっているのではない。したがって一つの例外を生み出す結果となっている。

日本語には It~that のような構文はないからたとえば主語があまりに長くなるようなら違った言い回しをするであろう。日本語や英語に限らずコミュニケーション上主語が相手に伝わりにくいくらい長いものになるようなら別の表現方法をとるのが普通なので、そういったことはおそらくどの言語にも起こるものだと思う。しかしこの場合重要なことは「後ろに置かれると」本来ならば英語では意味の変化を引き起こすという特徴があるのに、この例ではその影響が見られず、厳密に言えば形式と意味の間にある一定の対応関係に問題が生じてしまうことにある。これは裏返せば英語における形式の重要性を認識させることになる。一方、日本語のように語順以上に助詞が意味を決定する役割を果たしている言語は言語の持つ性格からして英語とはまったく違うのであるから、言葉の位置が英語ほど重要な役割を果たしているわけではないことも確認できる。（ただし誤解のないよう付け加えておくが言葉の位置が重要ではないと言っているわけではない。）

ここにあげた例は特別な状況にあるものだが、これまで見たように多くの場合英語では語順を変えた

だけで意味に多かれ少なかれ影響を及ぼす。第三文型から第四文型への書き換えで両者間に意味の差が生じるのは語の位置転換があるからである。文型という表現を我々日本人が母国語の文法を習う際は使わないのに英語で使われてきたのはまさにこういった英語の性格を反映しているからであろう。

英語は語の隣接（近接）や語順が重要な意味の差を生み出し、それが文型という特徴を作り出していることを見てきた。その一方、表現したい内容をコミュニケーション上、相手に理解しやすい形に変化させていく必要もある。言語は話し手が表現したい意味やニュアンスを伝える役目を果たさなければならぬが、それは受け取る側にとって内容を把握しやすいような形で提供されるということも同時に満たしたものでなければならないからである。したがって意味と形式に一つの対応関係を生み出している英語において、それぞれの意味内容を請け負う形を使って意味を伝達する方がコミュニケーション上よい手段であるはずだが、その形を使うとコミュニケーションに支障がでるかも知れない場合は別の形を使わざるを得ない。ただそれは結果的に意味と形式の間にある対応関係を崩してしまう。そのため統一的な説明が困難になる状況が生まれるのである。そうであれば形式と意味との間の対応関係は実は絶対的なものではないということになる。しかしそれは意味と形式の関係がなくなってしまうということでは決してない。形の違いが意味の違いにつながることはいくつもの構文の対比から間違いのない事実と言えるからである。

これまではある現象に対していくつかの例外が出てくると現在立てている前提を破棄し、反例となるものとの間にさらに別の次元の共通性を求めようとしてきた。しかし以上で見てきた具体的な例を考えると決してそういった処置をとる必要はない。こういった考え方を踏まえて例外と言われる例を検討していくことが大切だと思われるのである。

4 背反両立的側面

ある文とある文の形式が対応するかのよな性格を英語は備えているが故に、学習する早い時期に能動、受動の関係、第三、第四文型の関係の他、助動詞の書き換えなどが教えられてきた。助動詞を例にとれば will は be going to に書き換えられ、can は be able to に、そして must は have to に書き換えられるという内容である。しかしこれら助動詞の書き換えにも実は第三文型から第四文型に書き換えられる際に見られるような細かな意味の違いが両者の間にあることが知られている。そのうちの一つを取り上げてみる。

You must save money to buy a house. (= 'I'm telling you').

You have to save money to buy a house. (= 'This is the general rule').

Leech (1987: 83) によると must が使われている上の文は話し手が思っている内容を意味し、一方の have to は客観的な内容として語られているニュアンスを持つ。

1 で述べたように語は同じ表現でない限り文体的ニュアンスも含めそれぞれの語の間で違いが生じるのが普通であるから、これら両者にも今述べたように何らかの意味の違いが出て当然である。対となる形式(能動、受動、あるいは第三、第四文型)は形が違うからこそニュアンスも違い、独自の意味合いを持つ。したがって厳密に言えば二つとして同じ言葉というのではないという結論となる。

しかし同じではないということが、それらの間での互換性が全くないということになるかといえばそうではない。お父さん、父親、おやじ等、男親を表す語でも場面によって互換性がある場合が出てくるのと同じである。確かに must と have to は厳密には完全に同じ意味を持っているわけではないから、違う内容を意味し場面によって使い分けをする。しかし、たとえば will と must は一緒に使うことがで

きないという文法的制限があるため will と must の両方の意味を一文で表す場合は must を have to に代えて will have to という表現にしないといけない。その場合の have to は must に代わる「代用」として使われているのであるから must とほぼ同じ意味を表さないといけないことになる。そうでないと代用にはならないからだ。その立場から言うと第三文型、第四文型の違いからもわかるように「形や言葉が違えば意味も違う」という前提は英語では基本的には正しいことである一方で、3.2 で見たように長い間接目的語が来た場合には受け取り手側への配慮からその約束事を破ってもう一方の表現を使わざるを得ないということから代用が起こっていると考えられるのである。何よりも意味と形式との対応関係以上にコミュニケーション上での理解が優先されなければならないからである。しかし先ほどから何度も述べているようにそういう例が発生したからといって、決して対応関係のある意味と形式の基本が崩れてしまうわけではない。この助動詞の場合、本来 must が表す意味と have to が表す意味は違うものであるが文法的制約により、もう一方の形を使わざるを得ないことが起こっているからといって must と have to が同じ意味を持つようにはなっていない。これは先ほど述べた男親のいくつかの言い方それぞれが独自に果たす役割がある一方で重なるところがあるのと同じである。おやじ、父親、とうさん、それぞれ少しずつニュアンスが違うが、子供がおやじという言葉を知らない時にお父さんという言葉で言い換えその意味を伝えるのと同じなのである。語やその語を組み合わせで伝達したい内容を表す英語の形式というのはコミュニケーションの都合から言えば相補的關係を作り上げているのである。言葉がいかに合理的にできているかと言ったのはまさにそういったことである。そしてその合理性には何よりもまず言語の役目であるコミュニケーションのための優先度が強く影響する。それぞれ同じでは

ない語が違う意味を持つ方向に向かうという特徴（それは使う人間からすると細かなニュアンスを伝えられる）と同時に、複数の表現が並存することの利点（ある言い方が使えない状況の場合、それに代わる役割を果たしてくれるという利点）をも併せ持っている。全く矛盾したことのように見えるが、語の成り立ちに人間の価値観による区分、脳への記憶力の負担軽減など、人間の都合が大きく関わっていることから考えると、コミュニケーションの成り立ちにも人間の都合が関わっていると考えられるのである。

この観点に立って所有構文に見られるいくつかの例外を改めて考えてみたい。一つは A's B, B of A の両方で表すことの出来る主格、目的格に関するものである。A's B の形式は B より A に顕在性の高い名詞がくるという特徴を持っているために the train's arrival, John's assassination という表現が可能となる。具体的な（物理的な）存在の方が動詞派生名詞よりも顕在性が高いからである。一方、B of A の形式は内的関係を表し、動詞派生名詞はその行為を行うもの（あるいは受けるもの）との関係において内的関係にあると捉えることも可能なため、the arrival of the train, the assassination of John という表現が許される。いずれの形の条件にも合う A と B の組み合わせはどちらの形式でも表すことが出来る。しかし本来は must と have to が違うように A's B, B of A の形式もそれぞれ違った意味を持つ方向に傾く。実際 A's B の A は B との関係において主格、B of A の A は目的格との解釈が多い。違う表現は違う性質を帯びる方向に傾いていくという原理通りである。しかし A's B では絶対に主格、B of A なら目的格かというところではない。The arrival of the train の A と B との関係は arrival が自動詞であることから主格以外にはあり得ない。しかしこの主格の解釈が許されるのはもう一方 (A's B) での形式の表現が A の特徴から制限された

時に代わる役割を果たすという利点があるからだと考えられるのである。(A's B の A には生物あるいはそれに準じるものでなければ来ることができないという制限がある。)

また今述べたように A's B の形には A と B の間に顕在性の違いのあることが Langacker (1993) によって指摘されていた。A を手掛かりとして B を特定するという方法である。ところでその場合英語では B を特定する手掛かりは一つであることが構文上決まっている。A's B's C (たとえば John's mother's hat) という表現の場合、C は B によって特定され B は A によって特定されるのであって、A が C を特定するわけではない。したがって A's B において A は定冠詞の役割を果たしていることも指摘されている (Taylor : 1989b)。所有構文では一語だけで head noun である B を特定しなければならないのである。つまり A にあたるものが二つあることは許されないという性質が現代英語のこの形式では定着している。具体的な例で言うと this love of mine のような表現では二つの A (this という語と my という語) が B にあたる love を特定することは形式の構造上出来ないことになる (*my this love, *this my love)。そういう場合一方の A を B of A の形を使って後ろに置ければとても都合が良い。B of A は the B of A という表現があり A で B が特定される特徴もあるからである。

これまで that long nose of his という表現をどう扱ったらよいか大きな問題となっていた。なぜなら B of A の形式が担う部分全体関係としてこの A と B の関係を解釈すると a friend of mine の例のように彼には複数の鼻があり、そのうちの一つを意味していることになるからであった。しかし以上見てきたような言語に見られる特徴がここにも当てはまるのならこの例にまどわされることもなくなるはずである。こういった例を説明できないからといってこれまで多くの例を説明できた B of A の形式が

担っている意味を完全否定してしまうのは同じ言語内で見られる以上のような現象から考えてもおかしなことである。定冠詞相当の役割を同時に二つ持つことができない性格を A's B の形式が持っているためにこの形式と相補的關係を築きあげた B of A がそれを補う役割を果たしていると考えた方がはるかに言語事実には則しているのである。

助動詞に話を戻して言えば will とともに must の意味をも表現したい時、must に代わる言葉がなければ大変不便だろう。また文型に第三文型が存在せず第四文型の形しかなく、そのため長い間接目的語であっても動詞のあとに置く以外表現方法がなければ、直接目的語との切れ目がとても見えづらくなり、コミュニケーション上で支障をきたす可能性も大きいに違いない。その意味で複数の相補的役割を果たすことのできる（少なくとも）もう一つの「形式」を持つということは形式が重要な意味を持つ英語にとってとても重要なことなのである。

まとめ

英語は意味と形が重要な対応関係をもつ一方で、

形の上でのバランスも存在する。なぜなら言葉はコミュニケーションの手段であるのだから、出来るだけ内容をわかりやすく相手に伝えるよう形が変わっていく方向にも発展しなければならないからである。そのため形式と意味との間で確立している約束事のある状況において破る方向に働いてしまうことが起こるかも知れない。しかしある内容を伝える表現（形式）が複数存在すると、一つの構文では表現できない制約がある場合、もう一方（あるいは複数のうちのの一つ）がそれに代わる性質を備えていれば、ある構文では伝えられない（あるいは伝えるににくい）役割を補ってくれるという点で大変有益なのである。

A's B, B of A に一方でしか表現できない A と B の関係があり、また両者で表せる関係があるという理由を A, B の間の意味と形の対応関係だけで説明しようとするとは不可能である。しかし A's B と B of A の表現が同じ言語内に見られるような相補的關係をコミュニケーションの都合あるいは形式の持つ特徴からの制約上築いてきたと考えれば、なぜ問題とされる表現が生じたのか説明できるのである。

参考文献

- 平見勇雄 2006. 「英語所有構文に見られる英語全体に浸透している言語傾向との接点に関する考察」, 『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』 11, 129-141.
- 池上嘉彦 1978. 『意味の世界』 NHK ブックス.
- 池上嘉彦 1995. 『<英文法>を考える』 筑摩書房.
- 今井邦彦編 1985. 『英語変形文法』 大修館書店.
- Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦, 河上誓作 他 (訳) 『認知意味論』 紀伊国屋書店, 1993)
- Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』 大修館書店, 1986)
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions", *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. Longman.
- Taylor, John R. (1989b) "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27, 663-686.